

Title	A cross-cultural examination of the phenomenon of lying and its relationship to moral judgement
Sub Title	「嘘」現象及び嘘と道徳判断との関係に関する比較文化的研究
Author	林, 文瑛(Rin, Uenin)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- 第 641 号 陳 文媛 道德教育の再検討 一日本と台湾の 実践を手がかりにして一
- 第 642 号 藤原 淳賀 P. ティリッヒの信仰理解とその教育学的意義
- 第 643 号 柳田 雅明 私立大学経営に関する一考察

一ある実業家である学校経営者の工業単科大学における戦略、実行とその成果についての考察

- 第 644 号 山元 有一 教育の現象学的記述の可能性について

博 士 (昭和 63 年度)

教育学博士

甲 第 902 号 林 文 英

A CROSS-CULTURAL EXAMINATION OF THE PHENOMENON OF LYING AND ITS RELATIONSHIP TO MORAL JUDGMENT (「嘘」現象及び嘘と道德判断との関係に関する比較文化的研究)

〔論文審査担当者〕

- 主査 慶應義塾大学文学部教授, 社会学研究科委員
教育学博士 並 木 博
- 副査 慶應義塾大学新聞研究所教授,
社会学研究科委員, 哲学博士
岩 男 寿美子
- 副査 常磐大学人間科学部教授,
慶應義塾大学名誉教授
斉 藤 幸一郎
- 副査 お茶の水女子大学文教育学部助教授
内 藤 俊 史

〔内 容 の 要 旨〕

この論文は新しい心理学的視点から、嘘の現象及び嘘に関する道德判断を比較文化的、及び発達的に検討したものである。

個人面接及び質問紙法により、道德性の発達と嘘をつくことにおける良心、及び状況要因の役割についての調査を日本と台湾において行なった。それぞれの国で6才から21才までの児童、青年を被験者として、日本1029名、台湾945名の横断的データが得られた。調査の方法は、異なる判断情報を被験者に与え、判断を求めるPiagetとKohlbergの例話方式を著者の研究目的に合わせて修正したものである。

調査Iは、子供が嘘について判断あるいは評価する際、嘘をつく「意図」と「結果」の情報とがどのように

関係しているかを明らかにしようとしたものであり、さらに得られた結果をPiagetの調査結果と比較、検討したものである。調査Iの被験者は、日本と台湾の6才の幼稚園児と8才、10才、12才の小学生であった。結果によると幼児が「正直であれ」、つまり「嘘をつくな」という概念の理解に根本的な困難が見られた。つまり、「嘘をつくな」ということは、大人から律される変動不可の規範として認知されている。一方、8才と8才以上の子供は、嘘について意図と結果の両要素をともに判断の際考慮していた。より発達した道德判断において、状況的要因がより大切な役割を果していることを示したものである。

嘘の認知についての結果は、おおよそPiagetの調査結果を支持した。幼児が嘘を一義的に、また教条主義的にとらえるが、より大きい子供は、それに比べるともっと経験的にとらえ、その理由づけに社会的適応の規則により多くのウエイトを置いた。

この調査によって、意図、結果の両要素に基づいた先行研究の方法論的問題点いくつかが指摘された。特に例話が用いられる場合、意図、結果のほかに行為(手段)という変数に細心な注意を払う必要が示唆された。

調査IIは13才の中学生から20才以上の大学生、成人までを対象に、異なる嘘の葛藤場面において判断を下す際、特定の道德知識と実際面での道德上の選択の問題との関係を見ようとしたものである。考察によると、年齢の増加につれて道德の原則が社会規範になる傾向が認められた。「正直であれ」、つまり「嘘をつくな」という原則が義務論的道德というより、個人の置かれた状況に適用するかどうかの判断を必要とする考え方になっていく傾向がみられた。

調査の結果から、人が仮説的道德判断をする際と実際に行為に移す実際の判断する際、異なる選択をし、異なる理由づけを使うことが明らかになった。そして、身体的成熟と社会的経験の増加につれて、相対的な道德認知が多く見られた。こうしたことから道德判断の概念は多

義的であり、道徳性の発達を考える時、状況と行為の認知と判断について、十分に考えていかなければならないものと思われる。

比較文化的結果について、道徳判断の発達パターンに大きな違いが見られなかったが、判断する際の志向性に差異があった。台湾の被験者が一つの道徳判断をする際、個人のあらゆる面の上達改善に関心を示すが、日本の被験者はそれに比べて、もっと社会的適応に注意を向ける。本研究では、この両国の被験者の「嘘」概念に関する概念形成と判断基準の移行について、いくつかの考察をした。簡単にそれをまとめてみると、以下の結論になる：(1) 日本の子供は台湾の子供より早い時期で大人の価値体系から「脱出」する。(2) そして、権威に服従依存することもより少ない。かわって、(3) 日本の子供は peer group により大きな依存を示す。(4) つまり、日本の子供はより早い時期に自由かつ独立した判断が育つ環境に恵まれている。しかし、青年期になると、(5) 台湾の青少年の「個人主義的志向」「個人的責任感」の考えに対して日本の青少年は「役割的責任感」と「積極的協調性」を強調している。

なお、嘘に関する道徳的認知と判断について、調査データを総合的に考察してみると、以下のことが言えよう。一般に自己に有利な状況や事態では、嘘をつきやすくなることを示したものの、嘘をつく行為は状況によっては必ずしも道徳的意識や判断と関係するものでなく、対人関係の安定を保つためであり、自分の地位や役割を失わないためであり、自我水準を高めようとする欲求と関係する場合さえでてくることがわかった。そして共通する性質として他者が関与している状況においても、判断の基準と理由づけの分化が示された。「嘘をつくな」という原則を単に道徳的義務という視点からでなく、相対的に把握することが示唆された。道徳性の発達を理解するために、Piaget と Kohlberg のモデルのほかに、他の発達理論の可能性を検討する必要がある。

要約すれば、本研究は、すでに認識されている事実、つまり、社会的葛藤経験が嘘をつくことを増加させる；そして、嘘をつくことは年齢とともに増加することを実証したうえ、発達の、又文脈的に異なる社会要素の重要性を明らかにした。しかしながら、こうした発達の変化は何か一つの道徳原理に近づこうとする変化かどうかについて、本研究では明らかにさせることはできなかった。今後は、より適切な道徳判断及び行為決定を促進する道徳教育のために、道徳義務的な考え、現実的社会状況、及び社会的あるいは個人的価値を統合的に吟味する

発達のモデルが要請されるであろう。

〔論文審査の要旨〕

本論文は、著者が長年にわたって専心してきた道徳判断の発達の、及び交叉文化的研究の一環として行われた「嘘」の研究より成っている。「嘘」の科学的研究は、ピアジェ (J. Piaget) が1932年に独自の臨床実験の方法によって行なった幼児の観察に始まるといわれる。またコールバーグ (L. Kohlberg) は、ピアジェの道徳判断の発達の理論を礎にして道徳性の発達段階理論を構築したが、特にこの発達段階の操作化ないしは測定の手工が広く研究者達に受け入れられて、当該領域の研究の今日の隆盛をもたらしたといえる。著者はピアジェとコールバーグの研究を出発点としながらも、関連研究を広く展望するうちに、これらの理論、及び方法論に対して独自の批判的見解を持つに至っており、これらを乗り越えるべく企図された調査研究を過去約8ケ年にわたって地道に積み重ね、それなりの成果を上げたことは高く評価されるべきである。

本論文は英文で書かれた主論文と、別冊の副論文とから成り、後者には学会誌の掲載論文一篇、学会報告の抄録数篇、及び主論文のかなり詳細な日本語の要約が含まれている。主論文の構成は以下の通りである。第一章はピアジェとコールバーグを中心とした先行研究の展望であり、それに続いて本研究の目的が述べられている。第二章は研究1、第三章は研究2の報告であり、最後の第四章は全体的な討論にあてられている。

本研究において著者が「嘘」をテーマとする理由は次のように要約できよう。すなわち、私たちの日常生活に遍在する「嘘」は、道徳的知識や思考と行為との不一致を調べるための格好な状況であり、そこに見られる道徳的判断のメカニズムの解明を通じて、やがては道徳教育の実践に資する知見が得られると期待できる。そして著者は本研究の基本的問題意識として以下の三項目を挙げている。

- (1) 子どもや青少年は、嘘をつく場面のそれぞれにおける最も顕著な情報の手掛りを捉えて反応するであろう。つまり、これまでの道徳判断の研究に見られるように、判断の行なわれる文脈抜きで、認知的構造のみによる解明では不十分である。
- (2) 子どものもつ嘘概念は未分化であり、成長とともにより複雑なものに分化して、「嘘」が社会的適応に役立てられることもあると考えられる。
- (3) 大人の文化が子どもの道徳判断の基準の形成に影響

を及ぼすと考えられるので、交叉文化的データによる研究が必要である。

次に研究1は、「嘘」という行為の評価を通じて、道徳的認知と道徳的判断との関係に対する年令と文化の影響を明らかにしようとするものであり、ピアジェの提唱した動機論—結果論のパラダイムに基本的には依拠しながらも、特に例話の構成に関して、動機と結果、及び手段としての嘘行為をできるだけ明確な手掛りとして提示すべく著者は細心の注意を払っている。被験者は、日本と台湾の6~12才児約500名。嘘に関する質問項目と4つの「嘘場面」の例話を用いて、幼稚園児には個別的に、それ以外には集団的にこれらを施行した。得られた結果の主なものを一つあげれば、動機、結果がともに良ければ嘘という行為も嘘として定義されない傾向が年長児に多く見られたことから、道徳的原則が多くの要因との関係で柔軟に修正を受けることが明らかであるという。

研究2は、「嘘」の生じる道徳的葛藤場面について判断する時に、特定の道徳的知識や論理と道徳的な選択との関係を検討することをその目的として行われた。被験者は日本と台湾の小学一年生から大学生まで約1500名。研究1と同様の道徳的知識に関する質問紙に続いて、コールバーグのパラダイムに基づき青少年の生活に密着した嘘の生じる葛藤場面を三つ用いて、各場面について当為判断と現実的決定、及びそのような決定の理由づけを求めた。主な結果は、青年期の被験者にとって、自分の属している集団に受け入れられるために、集団の利益や規範に合わせるの方が、抽象的、論理的な道徳的価値に固執することよりも大切であるということである。

また、最後の第四章において著者は全体を総括して次のような結論を下している。

- (1) 道徳性の発達過程の一つの道徳的原則に焦点を合わせることによって明確に描くことができた。
- (2) 嘘に関する道徳的判断の発達は、普遍的原理というような形式的、抽象的な判断基準へ向かうのではなく、文脈に依存し具体的状況に沿った形で、かかわりのある他者に対する責任という判断基準へ向かうものである。つまり「嘘をつくな」という原則が、義務的、あるいは指令的道德から、個人の置かれた状況に適用すべきかどうかの判断を必要とするものへと変わって行く。
- (3) 文化的差異に関しては、台湾では社会環境に適応し、既存の社会的ルールに妥協しながら、自己の生存と発達のための道徳的原則を形成する傾向が見られた。一方日本では、同輩集団の利益や志向性に重点を置き、その要求に応じて道徳的原則を確立して行く傾向が見られ

た。

(4) 道徳教育に関しては次の示唆が得られた。即ち、道徳的原則を定義的に捉えることは現実では無意味になりがちであり、しかも概念と実存的状況とのくい違いによって、道徳的思考体系に混乱を生じる恐れがあるので、むしろ道徳的原則をより機能的に捉えた方がより道徳性の本質に近付かせることになる。

以上が本論文の概要である。ここで、著者の研究について幾つかの問題点を指摘しておきたい。まず研究の基本的枠組についてであるが、著者はこれを他律的道徳性対自律的道徳性に求めており、結果の解釈もほぼこれに従っている。著者の仮説を見る限り、このような枠組のみに従っているとは言えないのではあるが、この枠組自体が西欧文化に偏したものであるという批判もあり、この点についてのより細かな考察が欲しいところである。またピアジェとコールバーグの道徳性発達段階の研究を基本的枠組にしており、質問項目や例話も彼らの用いたものを多用している。これら二人の理論は一般には認知発達理論と一括して呼ばれることが多いが、両者には若干の差異も指摘されてきた。この点を考えると著者のとった枠組にはこれに関する考察も見られず、幾分安易にすぎるといふ感なしとしない。しかし、研究1でピアジェと同様の例話を用いながらも、例話の作成にあたっては、ピアジェの方式をそのまま踏襲せず、著者独自の実験的意図に従って計画的に例話を構成し、ピアジェに見られた多義性と曖昧性を極力排除している。同様に研究2においても道徳的葛藤を含む例話を用いる点ではコールバーグに従いながらも、著者自身の問題意識に基づいた例話の作成とデータの収集に多大の努力を払っている。要するにピアジェとコールバーグは著者の出発点ではあるが、決してそこに止まっている訳ではない。

次に概念の文化差について触れておきたい。本研究では、日本における調査と台湾における調査の両方で「嘘」という言葉がそのまま用いられている。著者は日本語の「嘘」に対応する言葉を台湾で用いたとしているが、しかし一見対応していると考えられる言葉に実は文化差が微妙に影響するという事を文化人類学が指摘している。にもかかわらず著者はこの点に気付いていないように見える。例えば研究2の結果の中で、「悪い言葉も嘘ですか」という問に対する「ハイ」の比率が、台湾では40%であるのに、日本ではわずか4%であるという事実に関して、著者の考察は台湾の被験者は日本のそれよりも、悪い言葉と嘘とを混同する傾向が強いとすることに止まっている。これは嘘という概念の違いによるものと考え

られ、少くとも日本では嘘と“悪い言葉”とは全く異った概念であると考えられる。

最後に、結果の解釈について触れておきたい。この種の研究においては、研究者にあらかじめ仮説があり、その検証のために質問紙や例話が作成され、それより実験者の意図に従って反応が得られる。そして、このようなデータの解釈については深い洞察力が必要である。しかし思弁に走り過ぎて、データの解釈が思い込みにならないためにも、実験者バイアスを排除するためにも、研究者に節度が求められる。著者の結論の導出の過程には、論理の展開に問題のあるものが二、三目に付いたことを指摘しておきたい。

以上のような幾つかの難点にもかかわらず、本研究には評価されるべき多くの点が認められるのであり、以下にそれらを列挙しておきたい。まず著者の得た結論について、既に述べたこと以外にも次のような注目すべきものがある。

(1) コールバーグ理論に対する反証として、非西欧社会では全6段階のうち第4段階以上の反応が少いこと、またこの理論が提唱した発達段階の順序に従わずに、とびこえてしまう発達過程の可能性も否定できないことが明らかである。

(2) 「嘘をつくこと」は子どもが分化した状態で初めて可能になり、その概念は年令とともに単純なものから複雑なものへと変化する。

(3) 「嘘をつく」という行為には、良い動機によるものもあれば悪い動機によるものもある。

(4) 国際比較についても興味深い事実が見出されており、例えば、日本の子どもが年令とともにより他律的になること、しつけについては台湾がより厳しいこと、「他人に迷惑をかけなければ嘘をついてもよい」とするものの数が台湾では学年とともに増加するが、日本では年齢による変化がないこと等、いずれも今後の論議を呼び得る結果である。

また著者は、個人による研究としてはこれ以上望むべくもない大きな標本数を取扱っており、しかも日本と台湾の二つの文化圏において一部インタビューを含めて質問紙と例話に対する反応プロトコルを求めている。この研究に要した労力は多大であり、また得られた結果は貴重である。著者はまた、来日以来この道徳性の発達の問題に対して、いわば正統的な研究方法を用いて一貫して取り組んでおり、研究者としての態度は実に真摯である。さらにつけ加えるならば、我が国と東アジア諸国との相互理解が重要な課題となっている現在、著者の研究は誠

に時宜を得ており、今後の国際関係改善に資する新しい視点からの研究として、その先駆性が強調されるべきである。私ども審査担当者は、本論文を契機に著者林文瑛君が当該領域における専門家としての地歩を固め、やがては我国と台湾の学問的橋渡し役として活躍することを確信してやまない。

以上の理由によって、本論文が教育学博士の学位を取得するに十分なものであると判定する。

教育学博士

乙 第1985号 俵木浩太郎

「教育」と「好学」

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学文学部教授、社会学研究科委員

西村 皓

副査 日本女子大学文学部教授、教育学博士

長井 和雄

副査 早稲田大学教育学部教授、文学博士

市村 尚久

副査 日本女子大学文学部教授

石川 松太郎

副査 慶應義塾大学文学部教授、社会学研究科委員

田中 克佳

〔学力確認担当者〕

慶應義塾大学文学部教授、社会学研究科委員

教育学博士 並木 博

慶應義塾大学文学部教授、社会学研究科委員

社会学博士 大淵 英雄

〔内容の要旨〕

本研究はいわゆる儒教思想のもつ教育性をその非教育性から区別し、その教育性を適正に評価することの現代的意義を明らかにせんとするものである。

すなわち、この区別を無視し、儒教思想＝封建思想＝反民主主義思想＝非教育的にとらえる発想は、近代日本の定礎者たる西郷隆盛、福沢諭吉らの人間形成がそれによってなされ、かつ彼等のエートスとさえなっていた儒教の教育的側面を評価しえないと考えられる。また「教育勅語」が一般に儒教思想に基礎をもつとされる場合のその儒教思想とは、むしろ君主権利至上主義的・政治的、その意味で非教育的と考えられる。

そもそも表意文字によって表される「教育」という概